

平成29年度URひと・まち・くらしシンポジウム

UR技術・研究報告会

パネルディスカッション 概要版

「これまでと今、これからの団地」

【コーディネーター】

『団地のはなし』編集者／東京R不動産 千葉 敬介 氏

【パネリスト】

作家／ジャーナリスト／『団地のはなし』執筆者 佐々木 俊尚 氏

ローカルライフ・マガジン『雛形』編集長
『暮らしと。』、『団地のはなし』編集者 森 若奈 氏

美術家／北澤潤八雲事務所代表
「サンセルフホテル」などを企画 北澤 潤 氏

都市再生機構東日本都市再生本部
事業企画部事業企画第1課 所 芳昭



平成29年10月11日（水）

日経ホール

「これまでと今、これからの団地」【千葉氏】

今回、URの『団地のはなし』、『暮らしと。』という本と一緒に企画させて頂いた事をきっかけに、本日コーディネーターをさせて頂きます。今日は「これまでと今、これからの団地」というテーマでお話しを進めていくのですが、“団地”の話をする前に、僕らの“暮らし”がこれからどうなっていくかということ、一度離れた視点から考え、その中から団地というものがあるのか、これからどんな課題があるのかということについて、お話をしていきたいと思えます。

それではパネリストの方々をご紹介します。

まず、今回のきっかけともなった、『団地のはなし』、『暮らしと。』の編集で一緒した森若奈さんです。「雛形」(<https://www.hinagata-mag.com/>)という移住サイトの編集長で、他のサイト、メディアとは違う、深い取材をされています。

次に、アーティストの北澤潤さんです。『暮らしと。』で北澤さんのアートプロジェクト取材しましたが、団地の空き店舗を“居間”に変える「リビングルーム（北本団地）」や、団地の空き家をホテルにしてしまう「サンセルフホテル（取手井野団地）」など、アーティストのイメージとは少し違う形で活動をされています。海外へも活動の場を広げられています。

続いて、ジャーナリストの佐々木俊尚さんです。佐々木さんも『団地のはなし』で対談をお願いしました。最近出された『そして、暮らしは共同体になる（アノニマ・スタジオ）』という本の中で、普通だけれども、とても居心地のいい暮らしが求めるスタイルだと話されていて、そんな風に暮らしを見ている佐々木さんのお考えをお話頂きたいなと思っています。

最後に、URの職員の所さんです。“団地でキャンプ”というおもしろい活動をされています。色々と団地の情報などもお話頂きたいと思っています。『団地のはなし』のご担当もされていました。



「ローカルライフ・マガジン『雛形（ひながた）』」【森氏】

私は地域の暮らしや働き方を紹介する「雛形」というウェブマガジンとフリーマガジンの編集をしております。ウェブでは、イベント情報や、インタビュー、その他連載記事などを主に日々更新しており、フリーマガジンは年に1回、2万部を全国300カ所のゲストハウスやカフェで配布をしています。この立ち上げをしたのが2015年1月で、構想を入れると4年程前になりますが、その当時“移住”という言葉は、定年退職後の田舎暮らしや自給自足などの、限られた人がするものというイメージがあり、地域で暮らすという選択肢があまり確立されていませんでした。でも、実際に地域に行くと、自発的に地域で暮らすことを選んで、自ら仕事や暮らしをつくり出している人がたくさんいました。そこで、彼らのように“いま地域で暮らす人”を主人公にしたメディアが立ち上げられないかと思い、『雛形』を立ち上げました。都市から地域という一方的な方向性ではなくて、地域と地域で知（情報）の循環がされるようなメディアをつくりたいと思い制作しています。今まで約3年間、全国に取材に行き移住された方々を取材してきましたが、その中のお二人を例に、感じたことや気づいたことをお話させて頂きます。

まず、「暮らしは“選ぶ”時代から、“つくる”時代へ」です。今まではある程度ルールに敷かれた選択肢の中を、少し受け身で生きていくような感覚がありましたが、今は自分らしく生きるにはどうしたらいいかを考え、自分たちで仕事や暮らしを切り開いていく人が増えているように感じています。ゴロウさんという方は、東京から鳥取の山奥へ移住した女性で、



イラストレーターの仕事をしていましたが、ある日“生活を作りたい”と思い立って単身移住。昔だったら、「鳥取に行ったらもう会えないね。」と友達とお別れしていたのが、今は様々な魅力的なイベントが各地域で開催されていることもあり、「鳥取に行くとき遊びにいくね。」と、お友達から言われたことが印象的だったとお話されていました。昔と今を比べると、時間や距離の感覚が人それぞれ変化してきているのではと感じています。彼女は当初、知り合いもいない状態でしたが、何も無い所から仕事や暮らしを作り出し、現在は茨城県に移住されています。一つの場所にとらわれず、2拠点、3拠点、移動していくような生き方というのが今後増えていくように感じています。

続いては、「土の人”と“風の人”をつなぐ人」です。地域ではよくその土地に暮らしている人を“土の人”、外から来た人を“風の人”という表現をしますが、そんな地元の人と、外から来た人のつなぎ方や、つなぐ人がとても重要だと感じる事がよくあります。団地でも、自治会の方と新しく引っ越してきた若い世代の方々とのコミュニティの育成が一つの課題であると思いますが、地域でも似たようなことがあります。年代問わず、地元の人と外の人とが交流して活気がある場所は、新しいコミュニティと既存のコミュニティをつなぐキーマンがいます。山口県萩市の塩満さんは、萩市出身で東京で働いた後、Uターンしてゲストハウスを立ち上げました。ゲストハウスの周辺は、もともと若い人々があまりいないような場所でしたが、オープン後は土日関わらず多くの人の出入りが生まれました。この最大の特徴は、地元の体育の先生や役所の人などの地元の人と、外から来たお客さんと同じ空間にいたことでした。また、このゲストハウスが出来たことでUターンする方も増え、美容院やパン屋さんなどお店も増えてきています。それぞれが自立している中で、緩やかにつながるコミュニティとなり、点と点が線となり、それが風土となり、萩の風景が変わりはじめています。なぜ地域の人に支持される場所になったか、地元の人に質問をすると、ゲストハウスのオープンの何年も前から、地元の人たちとの信頼関係を築いてきたことが分かりました。新しい発想やアイデアを取り入れて、地元の人と信頼関係を築いていくには、その順序やつなぐ人が大事だと感じました。

移住者の人たち取材していると、実家があるような地縁のある場所だけではない移住も広がってきていて、趣味や、地元が同じというつながりだけではなく、これからはもっと働き方や暮らし、目指す生き方が近い人や、同じインフラを持っている人同士などのコミュニティが強くなっていくのかなと個人的には感じています。

「アートの切り口による“ありえるはずの暮らし、社会”」【北澤氏】

僕は自分がアーティストである限り、常に日常の中で何に関心を持っているのか、何に違和感を持っているのか、そういった感覚を持つことが大事だと考えています。これまで考えてきたこと、そしてここ最近考えていることをキーワードとして共有しながら、団地でやってきた2つのプロジェクト、また最新のインドネシアでのプロジェクトを団地のはなしとつなげながらお話しできればと思っています。

これまでにやってきた主なプロジェクトはいわゆる美術作品ではなく、地域の中に入り、その地域の人たちと一緒にアートイベントを行っています。コンセプトにしているのは“コミュニティスペシフィック”です。“スペシフィック”というのはそこでしかできない、固有性を持っているということです。その地域、共同体、そのコミュニティでしかできないようなもの、団地なら団地のコミュニティでしかできないアートプロジェクトで、そこでしかできないアートは何だろうということを考えています。僕の考えでは本来、アートは民衆のものだと思っています。およそ5万年前に描かれたと言われる世界最古の芸術、洞窟壁画はある地域でその地域の人たちがつくったものです。飛躍はありますがそこから考えると、なにか特別な芸術家がつくる芸術作品というよりも、地域の中での民衆のアートというのが、本来の姿なのではないかと思っています。

最初のキーワードは「もうひとつの日常」です。日常と非日常ではなくて、日常の中に“もうひとつ別の扉を開けたら別の日常空間が広がっていた”というような空間をつかってみようという考えがありました。「リビングルーム」は、埼玉県北本市の北本団地の空き店舗を使って2010年に始めたプロジェクトで、その後、日本とネパール、7地域に展開してい



ました。団地の中心にある商店街の空き店舗に、まずはカーペットを敷きます。その後、団地内を回り、居住者の人から使わなくなった家具を集め、空き店舗に置きます。それを繰り返す。居間は“日常”ですが、地域の色々な人たちの“普段の日常”から一部分をちょっと頂いて来て、もうひとつの“別の居間空間”が団地の中に出来ていきました。そして、このリビングルームにあるものは全て、お家にあるものと物々交換できます。全く等価交換にはならないのですが、そのシステムによって常に内装が変化しつづけるリビングルームとなり、その時あるもので遊び方や過ごし方が変化していきます。目的なき空間をつくることによって、予想外のコミュニティを創造していく。ピアノが来たからコンサートを、映写機と映写技師の人がいたから映画館にしようなど、物だけではなくて人についても、団地の様々なキャラクターが集まって、そのときの「リビングルーム＝居間」に変容していきました。この活動は5年間続きました。

次のキーワードは「ありえるはずの社会」です。“あるべき社会”ではなくて、“こんな社会があり得るはずじゃないか”ということが、アートを切り口にすると実現できる。その例のひとつが「サンセルフホテル」で、UR都市機構の取手井野団地を舞台に、空き部屋をホテルに変えてしまうプロジェクトです。普通に考えたらあり得ないことですが、たくさんの人たちの協力があって実現しました。これも4年続きました。1年に1～2回しか現れない幻のホテルで、その日は団地がホテルに変わり、地域や団地に住んでいる人たちがホテルマンになって、お客さん2人を30人のホテルマンがおもてなしをします。おかみさんもいて、団地の形をした井野（いも）羊羹などでもてなします。また、日中には太陽光パネルで団地内を巡りエネルギーを集め、夜は団地産の電気でもてなします。手作りの“夜の太陽”（2.5mの特製バルーン）を団地内に上げ、日中に貯めた電気で灯し、普段は団地だけれども、夜の太陽が上がるその日だけホテルが現れる。こういうあり得そうであり得ないことを実際にやってみるとということによって「あり得るはずの社会」が描けるのではないかと、サンセルフホテルを通して考えてきました。20年前に団地から引っ越しをされたお客さんが来た際には、ホテルマンたちが昔と今の写真を部屋にレイアウトするなどのおもてなしをしました。団地そのものの様々な変化がある中で新たな活用を追い求めるだけでなく、これまでとこれからを見つめ直す“団地の吊り方”を創造的に考える必要もあるのではないかと、このとき感じました。



海外では台湾の南機場団地でも同じくこのサンセルフホテルプロジェクトを行い、日本と台湾の団地の違いも見えました。おもてなしの美学がある日本と、お客でもフレンドリーに接する台湾では同じプロジェクトでも異なる「ホテル」が生まれていきました。

また、最近ではインドネシアの首都ジャカルタの北部にある強制立ち退きの現場で、自分たちの「理想の家」とは何なのか、行き場を失った人たちと共に考えるプロジェクトをやりました。実は彼らの行き場として州政府が用意しているのがまさに団地なのです。最近「アートは弱きもののためにある」というフレーズがよく自分の中で浮かんで来ます。立ち退きにあった人や、団地の見捨てられてしまいそうな部屋など、そういう人や空間と一緒にプロジェクトをやっている気持ちがあり、まず目を向けることが大事ではないかと思っています。弱きものを救うためというより、弱さのなかにこそ可能性があるように感じています。

冒頭で述べた5万年前の洞窟壁画は実はインドネシアの山の中にあり、見に行きました。もともと海面近くだったその洞窟からは、壁画を描いていたであろう人々が主食としていた貝の殻が発見されていて、それはきっと他の哺乳類より弱く陸地のはじっこに追いやられた我々の祖先が、洞窟で絵を描いていたという事であり、弱きものとアートの繋がりを考えさせられるものでした。弱さと向き合って、新しい、「あり得るはずの社会」というものをアートという切り口でどう描けるのかということを考えていきたいと思っています。

「古い共同体の再構築」【佐々木氏】

私の本職はジャーナリストで、近代の終焉とテクノロジーの進化がわれわれの社会を一体どう変化させていくのかということを中心にテーマにしてずっと仕事をしています。ここ数年、ずっと実験的に3拠点生活をしています。3カ所を転々としながら何が見えてくるのか実践しつつ、同時にIターンやUターンのため、すごい勢いで東京の優秀な若者たちが地方に出て行くことによって、彼らのコミュニティがどう変わってきているのかというのをずっと追いかけて、色々な活動を一緒にしています。



冒頭に住まいの共同体のようなものが、戦後どう変わってきたのかということをお話したいと思います。戦前、働いている人の5割は農業に従事し、ほとんどの人が田舎にいた時代でした。戦後、高度経済成長が始まると、集団就職などで人が都会に出てきました。田舎には確固としたコミュニティがありますが、東京にそのようなコミュニティは存在せず、自分の所属する場所は会社にしかないため、共同体に対する欲望が強くなった。その当時、団地をコミュニティにできないかという考えがありました。昔、一般的だった階段が縦に貫いていた団地は、階段の両側に1つずつ住戸があり、4階建てだと8戸の家がその階段1つでつながって「縦長屋」と言われていました。ある埼玉県与野市の団地に引っ越したジャーナリストが書いた『箱族の町』というルポルタージュの本には、縦長屋の団地に引っ越した初日に、下の階の住人が訪ねてきて、縦に連なる8戸の住民が集まって、「これからここは共同体になりますから仲良くしましょう」とミーティングをしたと書かれています。一方で、田舎の方がいいのではというコミュニティ感覚を持った人も多く、今の団塊世代が学生運動の夢破れた後、ヒッピーとなって地方に行くというケースも結構多かったようです。このような共同体がともたくさんできていて、ヒッピーコミュニティと呼ばれていましたが、徐々に無くなっていきました。当時は通信手段が電話ぐらいしかなく、とても閉鎖的なコミュニティとなり徐々に解体されていきました。一方、80・90年代には団地も縦長屋の繋がりが希薄になっていき、今のタワーマンションに象徴されるような、横の階のつながりはあるが縦には一切つながりがないような状況となりました。さらに、横同士でもコミュニティ感覚が薄れ、住まいの共同体は80年代ぐらいになると、ほぼ解体されていきました。その中で、戦後日本の共同体意識を担ってくれたのは終身雇用の会社でした。2000年代ぐらいに入ると、終身雇用の企業というのがだんだん減っていき、もはや会社に帰属することが難しくなってきたことで、共同体をもう一度再考するような話が出てきます。それに対し、今の20・30代は危機感を強く持っていて、会社には帰属できないことから、地方に活路を求める人というのが増えていくという構造があるように思います。インターネットメディアのアンケート調査では、東京に住んでいる20代の40数パーセントが地方に住んでみたいと回答していて、地方へ期待をしているといえます。しかし、ここには一つの矛盾があり、今の20・30代の親は団塊世代前後の年齢となるため、地方から出てきている人たちが多く、若者たちの実家は首都圏で、田舎のコミュニティがどのようなものかもよく知らない中で、過剰に田舎のコミュニティに対して憧れを抱いているようです。今後一度失われた戦後のコミュニティ感覚を取り戻すために必要なことは、過剰に共同体に期待し過ぎず、同地圧力みたいなものを取り除いていくことが大事だと思います。

色々な試みがある中で、注目しているのは“エコビレッジ”という名前のヒッピー・コミュニー的なものを展開する20・30代が増えていることです。熊本県宇土半島の“サイハテ”というエコビレッジは、山の上に果樹園があり、そこに建物を建て、30人弱の人々が暮らしています。インターネットを使っているのでフェイスブックなどを使い、当然移動の自由も確保されているため、平日は東京や福岡に出て仕事をし、週末にはエコビレッジに戻り仕事するなど、相互に行き来をしています。人間関係も閉鎖的にならずに、SNSという新しいテクノロジーを使うことによって、人間関係の持続性みたいなものをうまく作っています。共同体感覚は持続しながら、テクノロジーの支えによって息苦しくならない、入れ換え可能な共同体のようなものをつくる動きが出てきていて、彼らを勝手に“ソーシャルヒッピー”と呼んでいます。何か新しい可能性があると考えています。いま、田舎だけではなく東京近郊でもものすごい勢いで空き家が増えています。それらを生き延びさせる手段は、開かれた息苦しくない共同体のようなものを地元の人と一緒に作り、もともとある共同体を再

構築して、新しいコミュニティをどう若い人たちの手でつくっていくか、そこが重要ではないかなと思います。

「これからどんな暮らしを目指していくのか」

千葉) これからどんな暮らしを目指していくのかというのをもう少しお話してきたと思いますが、例えば、佐々木さんのお話では、一気に東京の郊外を飛び越えて九州などのお話しになりますが、場所を選ぶという意味では何がフックになっているのでしょうか。

佐々木) 地方の人は、地元の魅力を「うちは景色がきれいで、そばがうまい」というのですが、同様な場所は日本の至るところにあり珍しくない。結局、人が集まる理由は、人であると思います。最初にきっかけの種蒔をした人につられて友人が移住したりすると、だんだん増えていきます。増えていき、ある程度ボリュームになってくると、「あそこなら行っても安心だよ」ということで、また人が増えるのではないのでしょうか。

千葉) 最初の何人は、すごく変なアンテナを持っていて、そこに引き寄せられているということなのではないのでしょうか。

佐々木) そういうことです。地域のコミュニティとよそから来た人をうまくブリッジするような誰かがいるかということだと思います。例えば移住するために役所についても仕事と住まいは分業になってしまっていて、進めづらい。「うちに相談してくれば、住まいの話も、仕事の話も相談に乗りますよ」みたいなNPOなどの人がいるかどうかの違いだけだと思います。

千葉) ちなみに、東京の近郊で佐々木さんが注目されているような共同体が形成されているところはあるのでしょうか。

佐々木) 個人的に最近すごく注目しているのは横須賀です。横須賀の手前に汐入という駅があって、崖の斜面にもものすごく広大な住宅街が広がっていて、3割ぐらい空き家です。なぜ空き家が多いかというと、余りにも崖なので車道がつけられない。駅から徒歩10分ですが、すべて階段みたいで、そこは今空き家になっています。面白がりな人たちが東京からどんどん集まってきていて、移住というよりは、週末に行ったりリノベーションなどを試みています。

千葉) それは若い人たちが集まってきているのでしょうか。

佐々木) 若い人たちや横須賀の地元の建築士さん、東京出ていったけれども地元を何とかしようと戻っている人、東京の美大の学生も集まって来ています。人があつまるには、面白いことができる場所があるかが重要であると思います。

千葉) 面白い場所を求めるとある一方で、『そして、暮らしは共同体になる』では、そこで営まれる一人一人の暮らしは“普通”で、いままでのような成り上がりやアウトサイダーではなく、居心地のいい暮らしを求めていくという視点で描かれていたのですが。

佐々木) 東京で優秀と言われる人たちは一時外資系企業に就職していましたが、最近は田舎に行って仕事をしています。東京は色々としがらみが多く大企業もたくさんあって自由に活動できないが、田舎じゃ何も無いが故に、何かやろうと思ったらやり易いと考えているようです。

千葉) それは優秀の定義がそういう人に移っているということではなく、同じキャラクターの人が目を向ける場所を変え始めているということでしょうか。

佐々木) 外資系企業などにバブル的な成長への期待はなく、東京で高級輸入車ぐらい乗れそうな人たちが田舎に行き、軽トラックに乗って、麦わら帽子をかぶり、農作業をしているというのが、現状であると思います

千葉) 森さんにお聞きします。ご紹介されたゴロウさんは、外資系企業にもいそにはないですが、なぜゴロウさんをご紹介頂いたのでしょうか。

森) やはり佐々木さんもおっしゃったとおり、少し変わった人が動き出しています。目立っていた人とか、東京で優秀な人が動き出したということが、今の流れをつくっていると感じています。また、東京を出る勇気がなかったけ



れども、素直に猫が飼いたかった、家を改装したかったなど、シンプルで純粋な生活をつくりたいという考えでもいいのではないかと取材を通じて感じています

千葉) その後、いろんな人を取材している中で、その地域で暮らすということを選んでいる人を取材していると思いますが、その中で印象的なことはありますか。

森) 先程も佐々木さんがおっしゃっていたように、結局きっかけは“人”であると思います。人が仕事を変えて、暮らしを変えて、生きる場所を変えるとき、きっかけになる人の存在は大きいのではないかと思います。

所) 団地の大家という立場で考えると、今、話に出てきているような、活発な人、力がある人をどうネットワークで発掘するのかが課題としてあげられるかなと思います。“団地”という場が既にあるので、人から場を探すというよりは、いかにそういった人たちを引き付けられるかということを考える必要があるかと。パワーがある方々のアンテナに引っかかるのは、日頃のSNSみたいな媒体なのか、もっとアナログで、人伝てに「何かおもしろそうな場所があるよ」とか、どういったきっかけでその人がそこに足を運ぶのでしょうか。団地を盛り上げたいと思い、われわれも「DANCHI Caravan」という団地の広大な屋外空間を活用してキャンプをするような取り組みとか、ソフト的な取り組みはいろいろとやってはいるのですが、われわれから仕掛けて何かをやるというのと、何かをしたい人にその場を提供してあげるというのと、主体性がどこにあるかで持続力が全然違うかなと思っています。



佐々木) その土地に内在的な受け皿としての能力は必要です。たとえば若者で、悶々としているところに会いに行くと「何か一緒にやろうよ」みたいな話ができるとか。逆に言うと、大抵の地域では排他的なところが多い中、そこでちゃんとよそ者を受け入れる土壌があるかどうか、あるいは先程も話したように田舎のコミュニティと都会のコミュニティをつなげる人が、その地域の共同体の中にいるが、受け入れられるような余地を持っている人がいるかどうかとか、そこが何もないと難しいと思います。

千葉) 北澤さんはそういう場所にアーティストとして入っていきますがどうでしょうか。

北澤) 移住という形ではないですが、地域に入り込んでいくというのを10年ぐらい日本でやってきて、先程の横須賀で崖に家が並んでいる景色にちょっと気持ちが“上がる”というような感覚は絶対必要だと思います。北本団地に初めて訪れた際に、屋根がついているアーケードを見て、“ここで何かしたいな”と思うわけです。やれることを提示されたからやるのではなく、そもそも何ができるかなと素材探しをしているので、あれこれと提供されても、その時点でちょっと引いた気持ちになると思います。何かいじりたい、触ってみたい、何か自分の思っていることをやってみたいと思う気持ちを受け皿となる側も持っていないと、選ばれないのではないかなとも思いました。

千葉) 北澤さんは、団地に限らなくてもいいのですが、この場所、何かできそうと思ったけれども、やっぱりやめたみたいなことはありますか。

北澤) 制度上、目に見えないルールでがんじがらめになっていて統制されている場所がありますよね。団地もそのような規定やシステムがしっかりしており、「サンセルフホテル」はハードルがものすごく高く準備に2年ぐらいかかりました。でも、僕にとってUR団地はそれでもやりたいと思わせる魅力、そういうポテンシャルがある場所です。だからやるわけです。逆に言えば、がんじがらめだし、しかもつまらないと感じさせるような場所では、そもそもやろうと思ったことがないです。

佐々木) 最近、急に商店街のシャッター街にゲストハウスができ始めています。なぜそのようなことが可能になったのかと聞いてみると「家主が亡くなり、孫が継いだからです。」という答で、世代交代が大事です。30代の孫が継ぐと、何かやらなければという気持ちで一気に変えようとします。地方に行くと限界集落が惨憺たる状況になっており、ほとんどが空き家になってしまっています。逆に伸びしろのある、今が丁度いいチャンスです。

北澤) プロジェクトを進める際に、長老世代やまちの自治会のトップの方々と、仲良くお酒を飲みながら、良い関係をつくった上で「こんなことをやりたいです。」と話をしながら進めていくプロセスはとても大事だと思います。ただ、いざやるとなると色々な問題が起きて、1・2年ぐらいかけて何とかやって来たにも関わらず、その後、上の人が亡くなった途端に若い人たちが違う方針で何かやり始めることもあります。世代が代わり、言わば誰もがプロジェクトをやる段階に入ってきているかもしれません。

千葉) 所さんも町田山崎でキャンプを行いました。なぜ町田山崎を選んだのですか。そこに何か、手を加えられれば魅力がでるなど、そのような視点でしょうか。

所) まず一つはとても魅力的な場所で、まとまった広場がありつつも、おじいちゃんが日向ぼっこしていたり、くつろいでいる雰囲気が見えたので、ここが色々な人の居場所になっていると感じたからです。また、自治会さんもすごくパワーがあり、団地祭りや防災訓練が活発な町田山崎団地で、ここで一緒に何かやるのが重要だと思いました。団地を含めた地域の中で、団地の存在意義を模索するために計画しました。直感的に場所の魅力を感じたということもありました。

千葉) 自治会が強過ぎると、自由にできなかつたりするかと思いますが、町田山崎はどんな感じだったのでしょうか。

所) 町田山崎は団地が好きな人たちが自治会さんにいたというのが非常に大きかったです。自治会長をされている方も、前向きなお考えをお持ちで、もともとご自身もバリバリとお仕事をされていた方なので、そういう推進力というのは衰えずお持ちだったことが、町田山崎の特徴だったかなと思います。

千葉) 北澤さんの北本団地と井野団地はどのような雰囲気でしたか。

北澤) 北本団地でリビングルームをやっていた時に、団地第1世代で住まれた自治会長さんや自治会の方々の、最初に住み始めた時代の話の何となくすごく面白い。その方々が住み始めて1日目の夜、住棟の数部屋しかライトがついていなかったが、次の日、その倍の数の部屋に電気が灯り、翌週になったら1棟全て点いていて、“ここで何かが始まる、ここから自分たちの生活をつくっていくんだ”というような開拓精神があったようです。いまの団地の長老の方々が、かつて経験されてきたことはまさにプロジェクトです。だからこそ、現在の逆に明かりが消えていく状況の中で、何かしなければいけない、何かしたくなるのだと感じます。



千葉) 北澤さんとしては、そこで最初に団地に住んだ人の気持ちを味わえたということでしょうか。

北澤) 同じような感覚になれるのかと思いました。つなぐ人も大事だと思いますが、本当は何かしたくなるような開拓精神や、しなければいけないという気持ちは世代を越えても何か似ている部分があると思います。その時の何か仕掛けようとしていた気持ちというのは、今の若い人たちが地方で何かをしようとしているところのモチベーションや、エネルギーと近いものがあるのかなと、みなさんの話を聞きながら思いました。

千葉) そろそろお時間になります。答えを出さずに広く、ゆるくお話しできたらと進めてきましたが、今回のお話しからこれからの団地について何か見ることがあれば良いと思います。ありがとうございました。